

ふれいす 東京

Positive Living And Community Empowerment Tokyoc

Contents

「セックスワーカーのいるまち」.....	1
さまざまな冊子とキャンペーンについて	2
「OUR DAYS Episode2」 展示イベント開催	5
ネストより	6
第 22 回日本エイズ学会学術集会 参加感想文	7
部門報告 (2008 年 10 ~ 12 月)	9

「セックスワーカーのいるまち」

大阪府立大学人間社会学部准教授 東 優子

「わたしたちが暮らすこの街には、セックスを仕事とする人たちが今日も働いています。」¹

これは、昨年度から継続して開催している「セックスワーカーのいるまち」というイベントの宣伝文です。私が研究代表をつとめている厚労省エイズ対策事業「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」が多くの協力者と共に企画し研究成果発表会として開催されたものです（主催：エイズ予防財団／詳細は <http://www.sexba.jp>）。

実は、私が考えていたテーマは「Bridging the Gap：研究成果をコミュニティに還元していくために」という、「当事者コミュニティ」を意識したものでした。ところが、出演者らと企画について話し合うなかで、「コミュニティ（単数形）じゃなくて、コミュニティーズ（複数形）じゃない？」「そもそも性風俗に係る人々にとってのコミュニティって何（どこ）？」といった議論があり、結果、「まち」というコンセプトが誕生したのです。

日本にも、かつては「赤線」で働く女性たちの組合が存在していました。新吉原女子保健組合は機関紙まで発行しており、そこには「組合活動の報告、性病予防のための手引きや覚せい剤の撲滅のよびかけなどの記事に加えて、詩、小説、俳句、映画案内あり、紙上相談あり、と、当時の売春婦たちの暮らしや想い」²が描かれています。1956（昭和31）年に「売春防止法」が制定される際には、こうした組合が全国的な反対運動を展開したといえます。

売春が非合法化されて組合は解散しても、いろいろなところで、いろいろな形で、女性たちは連帯し続けてきたことでしょう。しかし、たとえばエイズ・パンデミックによる負の影響をコミュニティの連帯・権利運動の活性化へと昇華させたゲイ・コミュニティと比較すると、同じく多大な影響を受けた性風俗業界には、新宿二丁目や大阪・堂山町に相当する「場」も、akta や dista といったコミュニティ・センターもありません。

ワーカー・アイデンティティが「着脱可能」で、性的少数者のありようとは異なるがゆえの当事者ニーズの違いなど、説明要因は様々に考えられます。いずれにしても、当事者のリアリティと固有のニーズをとらえるためには、彼らの多くが埋没する「まち」そのものを見つめ直すことから始めよう…そんな思いが「セックスワーカーのいるまち」には込められています。

「ワーカーとお客、ワーカーと経営者、異業種のワーカーどうし、ワーカーとワーカーではない人、コミュニティと行政と医療機関などの間にある『ギャップ』に、あきらめたり目をそらしたりすることなく…」¹

NGO として、あるいは個人として、地道な活動を継続してきた人々がいます。94 年の「横浜・国際エイズ会議」で、日本のワーカーとして初めて発表した桃河モモコさんが仲間と始めた「SWEETLY (Sex Workers! Encourage, Empower, Trust and Love Yourselves!)」や、1999 年に誕生した「SWASH (Sex Work and Sexual Health)」(現代表・要友紀子さん)の活動は、近年のそうした一例です。若い世代では、ブログやホームページを中心に活動を展開する個人も増えています。SWASH が設立当初から現在まで私たちを含む 3 つの研究班にかかわり、重要な役割を果たしてきたように、彼らの存在、彼らの財産である「信頼関係に基づくネットワーク」は、研究班にとっての必要不可欠な基盤となっています。ワーカーと活動をともにしてきた松沢呉一さんなど、ジェンダーを超え、業種を超えた協力者たちの存在も特筆すべきで、彼らとの出会いが、さらなるネットワークの広がりや活動の展開につながっています。

こうした出会いに感謝しつつ、それぞれが見つめる先にある、共通した願いに思いをはせつつ…。

注 1 斜体はすべて「セックスワーカーのいるまち」宣伝用のテキストからの抜粋

注 2 『復刻「婦人新風」新吉原女子保健組合機関紙』（明石書店）深江誠子の解説文より

さまざまな冊子とキャンペーンについて

～「エイズ予防のための戦略研究 MSM 首都圏グループ」より～

ゲイ・バイセクシュアル男性向けのあらたなアプローチが進んでいます。聴覚障害者向け「Ready Go!! ～ろう者のための HIV 入門～」、10 代を中心とした若者向け「ボクライフ!」、依存症やメンタルヘルスの課題を持った人向け「This is hope」、多言語によるリソース集「“REAL” Living Together 多言語版」、キース・ヘリングの作品を用いて、HIV の情報もより伝わりやすくアレンジした「FACE TO REAL」といった様々な冊子が発行されました。また、昨年 11 月から今年 1 月まで、52 件のイベントをつないだクラブキャンペーンが行われ、これらの冊子など 6700 セットが配布されました。

『Ready Go!! ～ろう者のための HIV 入門～』制作に関わって

スタッフを代表して：ごりら

この冊子制作に関わるきっかけは、akta の張さんからろう者向けの HIV に関する冊子を作りたいので手伝ってもらえないかという依頼を受けたことでした。聴覚障害者にとってもそのような冊子があった方が良いと思い、引き受けました。



私自身、数年前からこのような冊子の必要性を感じていましたが、なかなか実現することが出来ないうままでいました。しかし今回、15 年位前にドイツで発行された「ろう者のための AIDS 予防冊子」が運良く手元に残っていたので、これを参考にしながら過去の内容が現在にそぐわないところを修正・加筆しました。

またろう者は文章を読んで内容を理解することが苦手な人もいるため、手話表現の写真を入れたりコメントを加えることによって、誰にでも分かりやすく予防知識も高まりやすいということを目指し、進めていきました。モデル起用については、どのようにしたらよいか、ずいぶん悩みました。ゲイ雑誌等に出演したモデルさんに手話で表現してもらえば、よりたくさんの方の興味をひき最後まで読んでもらえるのではないかと思います。また、手話の本には載っていないゲイ関連および性行為の手話を掲載したりするのもよいのではと提案したところ、みんなの賛同を得ることができました。

そして最終的にこのような立派な冊子ができあがり、本当にうれしく思っています。11 月中旬に J.R.D.C. (日本レインボー聴覚障害者団体) 15 周年記念パーティにおいて、記念品として冊子を配布し感想を聞いたところ、「こん

な本が欲しかった」「解りやすくて良い」「モデルも手話は出来るの？」などの多くの感激コメントをもらいました。

このような冊子は、おそらくアジアでは初めて出来たものだと思います。ただ、手話は言語と同じように各国共通ではありません。これを念頭に、冊子を読んで頂ければと思います。

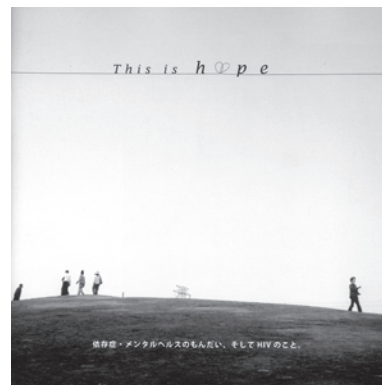
最後まで協力して頂いた、ぷれいす東京および akta、そして編集などをして頂いた皆様、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

「絶望から希望を—『This is hope』編集にあたって」

谷山 廣

(「This is hope」エディター、アルコール依存症当事者)

アルコールや薬物依存の問題を持つセクシュアルマイノリティ当事者の回復を目指す活動が、LGBT コミュニティに認知される機会は以前ほとんどありませんでした。アルコール依存症の自助グループのミーティングが akta で行われるよう



になり、徐々にコミュニティの中でも依存症という「病気」について公に語られる機会が増えてきました。そのなかで、とりわけ HIV 感染者のなかに、依存症で苦しんでいるながらも対処の知識を持っていない人たちが多く存在する、という事実が浮かび上がってきたのです。

依存症という病気は、本人がそれを「疾患」として認めることがとても難しく、医療機関や専門機関で治療をしたり自助グループ・専門施設で回復を試みたりするという「発想」にいたる道のりも、困難を極めるケースが多いのが実情です。依存症という病気かもしれないまだ苦しんでいる人たちが、「治療」への道をみだしてくれたら。そんな願いをこめて、冊子「This is hope」は編まれました。

依存症の問題をもつ LGBT 当事者が語った経験を軸に、依存症という「病気」への対処の仕方、回復に役立つ各団体・機関の情報がまとめられたシンプルな構成です。そこには「自分の経験を述べ伝えることが回復への道である」という、依存症に取り組む自助グループのほとんどに共通する考え方が活かされています。

冊子を手にした読者が、いくつかのエピソードから何かひとつでも共感を覚え、誰にでもおこりうる依存の苦しみに対処する際のヒントとして、手元においてもらえることを願っています。

「入口」の役割を果たす冊子『ボクライフ!』に期待

ピアフレンズ代表 石川大我 (いしかわ・たいが)

「いわゆる“デビュー”前のMSMのこたち向けに冊子をつくろう!」というお話をいただいたのは、私の主宰している、ゲイユースのための友だちづくりイベント「ピアフレンズ」のゲストスピーカーとして生島嗣さんをお迎えしたことがキッカケでした。



イベント当日、生島さんからは、既にゲイコミュニティに関わっているゲイ/バイセクシュアル男性と違い、デビュー前もしくはコミュニティとあまり関わりことなく暮らす10代20代のゲイ/バイセクシュアル男性に対して、HIVの予防啓発情報を伝えるのは非常に難しい、というお話をうかがいました。ピアフレンズはまさにそうした、“初心者”を対象としているイベントですので、何かコラボレーションができないか、ということでこの冊子「ボクライフ!」づくりはスタートしました。

ゲイ/バイセクシュアルであることに自信のない当事者でも手にとり、読みやすいように、イラストをふんだんに入れ、内容は自分にちょっぴり自信のない主人公「カケル」君がピアフレンズに参加し、HIVに関する知識も身につけ自分に自信をもって生きていこうとするまでのストーリー仕立てになっています。イラストはピアフレンズに参加経験のあるイラストレーターにお願いして描いてもらいました。

この冊子は、まだデビューしたて、という当事者はもちろん、ゲイ/バイセクシュアルとして孤立する当事者にも届けたいと考えています。学校の保健室や公共の図書館など、ゲイコミュニティを離れた場所でも配布し、今までHIVの予防啓発情報にアクセスできなかった人たちの“入口”の役割を果たすなど、新たな可能性を模索できればと思います。

「REAL 多言語版について」

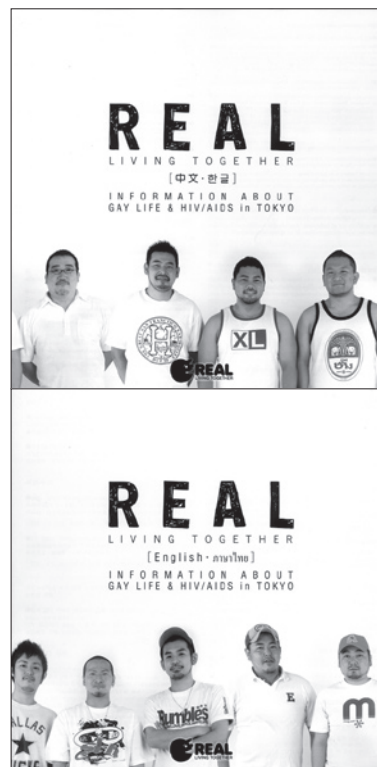
日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス
長谷川 博史

最近、ゲイ・コミュニティやゲイ・イベントの会場で実感するのは、アジア諸国から来日する人たちが増えていることです。その目的は旅行、就学、就労とさまざまです。

もともとアジアでは欧米諸国と異なりゲイ、バイセクシュアルが社会的承認を受けている国はほとんどなく、どの政府もMSM対策に熱心ではありません。そんな背景から多くの人たちは母国でもじゅうぶんな予防情報を提供されていない上に、社会全体としては低流行国とされている日本でHIV/AIDSの問題に直面しているとは思っていないようです。

そこで今回REALの多言語版の制作をお手伝いさせていただくことになり、英語、韓国語、中国語、タイ語での情報リソース集「REAL 多言語版」が完成しました。

この作業を通じて情報以前に彼らに向けたサービスそのものが極めて少ないことを痛感しました。いくつかのNGOは熱心に支援活動を行っているのですが、数千から数万という小さな母国語コミュニティで自分がMSMであることを開示してサービスを受けることはできないという声も聞こえてきます。今後、外国人ゲイ、バイセクシュアルに向けた支援サービスの充実が望まれます。



「東京のクラブパーティーで蘇ったキース・ヘリングのメッセージ」

梁瀬 薫

15歳でマリファナを始め、酒とセックス、ドラッグに染まり、地元ではお墨付きの問題児。高校を卒業しニューヨークの美術学校に入学し、1980年代アート・シーンに頭角を現し、瞬く間に世界に注目されたアーティスト、キース・ヘリング。グラフィティ・アート、ストリート・アートという言葉で今も知られるキース・ヘリングは、1990年エイズで死んだ。31歳だった。

キース・ヘリングが生きた80年代は米国経済不況の混沌の時代だ。ニューヨークは今とは違い、最悪の犯罪都市。フリー・セックス、ドラッグ、暴力、貧困…。それでもゲイ・カルチャーが華を咲かせ、クラブ・シーンは盛り上がり、ストリート・アートが生まれ、街もカルチャーも人々もフルパワーだった。ポップアートに君臨するアンディー・ウォーホルやマドンナもそんな状況下から誕生している。

ヘリングがカミングアウトした78年頃にはまだAIDSという言葉さえ無く、「ゲイ・キャンサー(癌)」と呼ばれて恐れられていた。インターネットも携帯電話もまだ無く、情報源は限られていたから盲目的な恐怖がどこにでも潜んでいた。遊びは真剣そのものだった。ヘリングが死んでから20年足らず、テクノロジーの驚くべき発達によってあの恐怖感はなく、世界はグローバル化し、人々は健康志向となったが、大切な何かを無くしてしまったような気もする。それでも人々は愛し合い、生き続けている。

2008年小淵沢にある中村キース・ヘリング美術館で、キース・ヘリング生誕50周年記念展が開催されたことをきっかけに、「Living Together 計画」を通して日本のエイズ予防のための活動を知った。美術館のイベントでも手記を朗読してもらった。日々の現実、自分自身と向き合う生の声に、観客は誰もが引きつけられた。彼らに関わる「エイズ予防のための戦略研究・MSM首都圏グループ」から

同年12月の世界エイズ・デーにちなんだクラブ・キャンペーンでヘリングの作品イメージを使用したというリクエストを受けた。冊子、バッグ、 Condom、映像使用など、用途は多岐に及ぶ。ちょうど同時期に東京の某巨大クラブのイベン



ト制作会社からもヘリング使用の依頼があり、財団が認可せず、もめていた最中だった。REAL Living Togetherのキャンペーンに財団が果たして許可するかどうか確信はなかった。このキャンペーンを成功させるためにも、やはりエイズリサーチや慈善事業活動を熱心に引き継いでいるヘリング財団に「エイズ予防のための戦略研究・MSM 首都圏グループ」の活動を理解してもらいたかった。「いつどこで、誰が、何の目的で、いくらで」というお決まりの質問に答える前に、なぜゲイ・ナイトのクラブでキャンペーンをするのか、なぜこれほどまで詳細なパンフレットを絵入りで制作するのかを問われた。諸々を説明するため、同じ先進国日本でのエイズに対する現在の認識が欧米に比べて極めて低い、という事実から伝える必要があった。

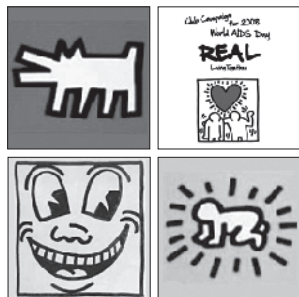
ようやくデザイン・レイアウトを見せる段階まで来たときは、もうキャンペーン開始前1ヶ月を切っていた。「作品をイラストのように扱うな」「冊子の内容と絵柄が合わない」などなど、財団は厳しい。東京とNYで緊迫のやりとりが続いた。張さんも、冊子編集スタッフも連日徹夜状態でデザインに取り組んでくれた。結果として財団からの信頼が得られたのは言うまでもない。すべての著作権料が免除になったのだ。

キース・ヘリングのメッセージが時代と言葉を超えて日本のゲイ・ナイトで蘇るのだ。大晦日の東京で最後のカウントダウンパーティーが幕を閉じたころ、NYでシャンペンのかを飲んだ。

「Club Campaign for 2008 World AIDS Day-REAL Living Together-2008.11.21-2008.12.31」

Rainbow Ring / community center akta
荒木 順子

キャンペーンでは、“キース・ヘリング”をフィーチャーしたバッグにコンドームや各種冊子を入れたセットを首都圏52パーティー、55回、11カ所で6700セットを配布した。N.Y.のクラブで遊んでいたキースは、音楽好きのファンも多く、どこでもとても好評だった。30代以上の人たちは、懐かしさもあって歓声をあげていた。大きめのバッグには、AIDS DAYの文字があるが、パッケージのファッション性も手強い、プライバシーの問題から自宅に持ち帰る事を拒否されたケースは思いのほか少ない。抵抗感が少しゆるんできていますよ



うな印象をうけた。

長い間パーティーを開催しているオーガナイザー達は、特に協力的で、薬物やHIVの現状に関して専門家や当事者を招いて行われたクラブキャンペーンの説明会から参加され、今後の活動継続へのリクエストも頂いた。きっと陽性のともだちがいたり、相談の経験をお持ちなのだ。

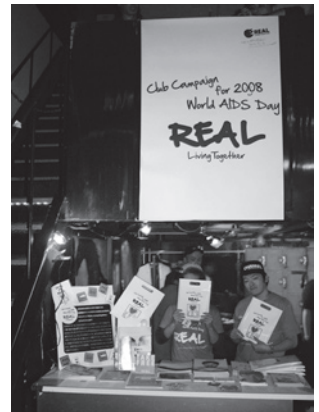
イベント会場でディスプレーの冊子を読みふけて

いる人や、パーティー帰りのバスで、写真を見ながら友達と感染経路についておしゃべりする姿などが見られた。キャンペーンを展開してゆく中で、参加したいという声がかかれたのは嬉しかった。また、「ゲイの友達が何人も感染していて、なにかやりたいとずっと思っていた」と語ってくれた女性DJの言葉が印象的だ。今回メインターゲットは、ゲイ・バイセクシュアル男性だが、そのまわりでいっしょに遊んでいる女性やストレートの男性たちにも手渡していった。彼らにも、共に知って、感じることで、“橋”になってもらえたらとの思いが、私の中にあった。

冊子には、HIV陽性者の手記をはじめ、ドラッグなど依存症体験者の言葉も掲載されていて、ずしりとくる。ディープでびっくりした！という声もあった。でも、だから、手渡した。ブースを作ったり、お揃いのTシャツを着て笑顔で一人一人に手渡してゆく。もしもの事があっても、あなたは特別ななんかじゃないし、応援している人たちがいるよ、ってことを知っていて欲しいから。

音好きのクラブピープルが、朝から沢山集まるアフターパーティーでは、ヘロヘロになってる人に、祈るような気持ちで手渡していった。

ここからがスタートだ。



イベント会場の入り口でグッズの配布



キャンペーン用のTシャツやグッズ

※冊子の取り扱い、入手方法については「エイズ戦略研究 MSM 首都圏グループ」事務局 (e-mail:senryaku.tokyo@gmail.com) までお問い合わせください。

「OUR DAYS Episode2」 展示イベント開催

HIV 陽性者の手記を集めた冊子「OUR DAYS」の第二弾 Episode2 の発行に合わせて、今年も新宿二丁目の CoCoLo cafe とコミュニティセンター akta にて展示プログラムが行われました。(ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS / エイズ予防のための戦略研究・MSM 首都圏グループによる)

akta では、1 人の陽性者の手記を時系列に沿って並べることで冊子とはまた違う感覚で読んでいただける企画展「episode from OUR DAYS」を 11 月 25 日から 2 週間開催しました。堀井拓嗣さんにご提供いただいたイメージ写真を併せて展示し、また「カミングアウト・テーブル」と題し、もし自分が HIV 陽性になったら「伝えたい相手・言えない相手・迷う相手」を来場者の方に書いていただきテーブルに直接貼るという、参加型企画も行いました。

また CoCoLo cafe においては「OUR DAYS Episode2」に写真をご提供いただいたカメラマンの本多晃さんの作品を展示するとともに、前年の企画でも好評だったランチョンシートでの冊子の PR を 12 月 2 日から 1 ヶ月にわたって行いました。

どちらの会場でも多くの方にご来場いただき、冊子を手にとっていただくことができました。イベント実施にご協力いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

(sakura)

「僕の出来ること = 『巻き込み』」

やすし

昨年、ぶれいす東京の新人合同研修を受け、僕にとってのボランティア活動デビューになった今回の展示イベント「episode from OUR DAYS」。

と、偉そうに言っても、会場の akta での設営を数時間お手伝いしただけ。他に僕が出来ることと言えば、この展示のことを僕の周囲の人に告知すること。SNS やメールを駆使して友人に声を掛けまくった。

僕自身、HIV に関わる手記はいろいろと読んだことがあったけれど、時系列的に同じ人の言葉を続けて読むのは初めて。時の流れと共にユウジさんの感情や、周囲が変化していく動きが伝わってくる。手記には素敵な写真が添えられ、まるでユウジさんの秘密のアルバムを覗き見しているような感覚を受けた。それだけのリアリティをもって、僕の心に刺さってきた。



冊子「OUR DAYS Episode2」の表紙



時系列に並んだユウジさん手記と堀井拓嗣さんによる写真



カミングアウト・テーブル akta 展にて

ストレートの友人が akta に足を運んでくれた。ある企業にて採用業務を担当する彼女は、可否を決める段階ではやはり自然に保守的な判断を優先させることが多い自分を省み、HIV と企業人事に関して考える契機になったと語ってくれた。とあるゲイの友人は、会場に行く暇はなかったけど、今度 HIV 検査に行くことにしたと僕に連絡をくれた。普段はあまり関心を示さない僕のパートナーは、食い入るように一連の展示された手記を読み、家に帰ってから夜中まで、「もし感染したら」ということについて二人で何時間も話をした。

微力であるかもしれないが、周囲の人を一人ずつでも良いから巻き込んでいくという形で、今後も活動に関わっていきたいと思う。それが僕の出来ること。HIV/AIDS を巡る社会の大きな動きになることを信じて。

「展示を終えて」

栗山 雄一郎 @CoCoLo cafe

CoCoLo cafe では、07 年 12 月に「OUR DAYS・DISHES」と題したパネル展を、08 年 12 月に「OUR DAYS Episode2」に使用された写真の展示を実施しました。2 回とも、内容とリンクしたランチョンシートを全卓に置いたりもしました。

普段から、展示を通して、お客様に色々な感情や情報をささやかなお土産みたいに持ち帰ってもらえればと思っています。

普段は“作品展”という趣なのですが、“広告スペース(大げさですが)”として使うのも面白いのでは？と想着いて、加えて地元で様々な活動をしている人たちと並走(おこがましいですが)していなきゃ!とも想着いて、大切な事を素敵な形で伝える活動をしていっしょるぶれいす東京さんに恐れ多くも声をお掛けし、相当強引に素材を制作して頂き、展示が実現したという次第です。

“HIV に関する展示”に違和感を覚えた方もいたようですが、より普遍的で、多くの人が少しだけ生きやすくなるようなメッセージを含んだ冊子に触れるきっかけとしての展示が出来て良かったですし、違和感を覚えた人に対して、その感情と向き合うきっかけになったのなら、展示も決して無駄ではなかったと思っています。

冊子の内容をどこまで具体的に提示するか / イメージに留めるかは悩み所で、ちょうど良い感じをまだ掴めていないという思いが残っています。もし再び展示の機会があれば、冊子に込められた思いをもう少しだけ丁寧に伝えるために、無い知恵を捻ってみたいと思っています。



CoCoLo cafe の店内の展示

ネストより

ネストではさまざまなプログラムやイベントを催しています。少人数で集まるグループミーティング、ゲストを招いての学習会、パーティ形式の交流会などの他にも、カフェスタイルのひとときや、季節のお茶会などもあります。今回は「Women's Salon」「カフェ・ネスト」「ネスト年末パーティ」「お茶会」のスタッフやご亭主からのメッセージをお届けします。

「カフェ・ネストへどうぞ」

カフェ・ネスト 八木

より心地よい時間を共有するために、今度はどんな工夫を試みようか、あるいは何を準備しようかと、私たちスタッフはいつもワクワクしながら話し合っています。来て下さる皆さんの反応を楽しみにしながら、同じ場所で自分たちも一緒に楽しむ！というのが、ちょっとちゃっかりしてますが、最初の頃からの私たちのポリシーです。そのスタンスはスタートから二年経った今も変わっていません。そして、開始当初の初々しさを、今もしっかりと保持しつつ励んでおります。（というか、未だに初歩的なヘマをしては笑われています。）おかげで、カフェの時間は、スタッフである私たちにとっても、今やかけがえのない大切なひとときとなりました。



カフェ・ネストのスタッフが丹精込めたベランダの花たち

そんなカフェ・ネストの名も最近ではすっかり定着したのか、「前から来てみたかったんです」という声が、以前にも増して多く聞かれるようになりました。また、この時間のために、遠方からわざわざ足を運んで下さる方もいます。あるいはほぼ毎回欠かさず来て下さる方、ありがたい差し入れをして下さる方、調べものを請け負って下さる方、最新の街角情報を持って来て下さる方、いつも楽しい話題を提供して下さる方などなど、カフェ・ネストはいろんな多くの方々によって支えられています。それに、年間を通して、どんな悪天候の中でも必ずどなたかが来て下さいます。本当に嬉しい限りです。

しかし、長く続けている中では心配なことも多少はあります。しばらくお目にかかっていない方の事が気になったり、逆に久しぶりに顔を見せて下さる方もあってホッとしたり…。いずれにしても「待つ」という事の大切さを身にしみて想うこの頃です。

こうして回を重ね、互いに交流を深めて行く中で、近頃では利用者の方々それぞれが何かしらの特技や得意分野を持っているという事も、少しずつ見えてくるようになりました。おかげで、ネスト自体にもそのことが活かされて、さらに居心地の良い空間を作り出すための助けになって来ているように感じます。もちろん、これは私たちの手を超えたところのことなのですが、このような豊かな情報交換の場としての機能もまた、カフェ・ネストの新しい魅力となりつつあるようです。

平日の午後という時間的な制約もありますが、何かのついでに、友達の部屋を訪ねるようなつもりで、ネスト利用者の方はどうぞ気楽にいらしてください。これからも、私たちスタッフが笑顔でお迎えさせていただきます。

（「ぶれいす東京 2007 年度年間活動報告書」より）

「Women's Salon のスタッフになって」

Women's Salon スタッフ 佐藤 由加

日差しの強い、半そででも暑いと思う日に、Women's Salon は開かれました。お部屋の準備をしているときは、どんな会になるのだろうとドキドキしていましたが、参加されたお二人、池上さん、はらださんのおかげで、会が無事に終わりました。ありがとうございました。



Women's Salon の新しいスタッフ 佐藤由加さん

女性の陽性者は、マイノリティの中のマイノリティだ、という言葉がありました。人数そのものだけではなく、社会から孤立しがちな女性像が表された言葉ではないかと、はっとさせられました。薬を飲むことへの不安や、働かなくても働くことが出来ないもどかしさなどを感じながら日々を送ることに、男性も女性もかわりはないかもしれません。ですが、理由ははっきりわからないけれど女性同士だから話せる、と思うことは、少なくないのかもしれません。

堅苦しい時間ではなく、お茶を飲みながら話したいことを話すという場所になればと思っていたのですが、いかがでしたでしょうか。今後は、参加された方々の声を聞き、より充実した時間を共有できる場にしたいと思っています。

「2008 年 ネスト年末パーティ」

はらだ

12/20（土）の午後、ネストの年末パーティがひらかれ、ネスト利用者、代表の池上さんはじめスタッフ、カフェ・ネスト・ボランティア、あわせて 35 名が集いました。

朝起きた時は、小雨がふっていて心配しましたが、パーティが始まる頃はいい天気！ベランダもフル活用できました。

カフェ・ネストの石崎さん特製の豚汁に、おにぎり、おいしい差し入れなどもいただいて、それぞれに交流しながら、心もからだも暖まったところで、一言コーナー。途中からいらっしやる方もいて、座りきれないほどになってしまいました。あとからきて突然一言になってしまった方、申し訳ありませんでした。でもそこは、ぶれいす東京、パスもありなので、人前で話すのが苦手な方でも大丈夫です。初めての方、今年もお会いする方、久しぶりの方、いろいろ話す人、話さない人、それぞれの方の近況や感想などをきいているうちに、2008 年の疲れもふっとんで、来年もがんばろう！という気持ちになりました。スタッフからの一



年末パーティには人もいっぱい、ごちそうもいっぱい。

言も、爆笑あり、意外な面ありで個性がでていました。

そして再び温かい飲み物とともに交流タイム。毎年つくシフォンケーキはさんざんな出来でしたが、味はおいしいといっていたので、ちょっとほっとしました。差し入れのスイーツなどもいただいて、盛会のうちにお開きとなりました。

お手伝い・差し入れ・カンパをしてくださった方、参加した利用者・スタッフの皆様、今年もネストのよいしめとなりました。ありがとうございます。

「ネスト庵より」

あずま

2001年に始めたネストでの茶会も、仕事や家庭の都合とも折り合いを付けながら、マイペースで二十数回目！気づけば長く続いたものです。

春の茶会、薫風の茶会、月見の茶会、歳暮の茶会など…季節折々のテーマで催してきました。茶箱やテーブルでのカジュアルな時もありました。一月からすべての月にやったのですがその時季に合ったしつらえでできていたでしょうか？お菓子は梅雨時には紫陽花、初夏には青梅など季節を表したものを用意し、花は庭に咲いたものを摘んできました。忙しくゆとりの無い日々の生活で潤いが無くなって

いますが、季節感を感じていただければ幸いです。

お茶は敷居が高いと思っている方もいらっしゃるでしょうが、限られた道具での組み合わせですし、手前も簡略し初めての方にも楽しんでいただいているのではないかと思います。

2000年に陽性告知を受けた後、ネストに来て悩みを話し、人の話を聞いてすいぶん気持ちが楽になりました。

その何分の一かでもお返しができたらいいと思っていますので、部屋に籠もっている方や悩みを自分一人で抱え込んでる人が、ネストに来るきっかけになればいいですね！ほんのひと時、みんなで一緒に楽しんでみませんか～！



ネスト庵「歳暮のお茶会」のしつらえ

第22回日本エイズ学会学術集会 参加感想文

「内なる想い」

福原 寿弥

第22回日本エイズ学会学術集会に参加した。11月26日(水)～28日(金)の3日間、大阪の上本町「大阪国際交流センター」にて開催された。ぶれいす東京からも様々な形での参加があった。

池上が座長のシンポジウム「日本のエイズ対策はどこへ向かうのか？」では、行政官や学会を代表する医師の報告のあと、自ら活動する陽性者から「マラソンを100m走の勢いで走り続け、誰かにバトンを渡そうとする心境」との追加発言がなされた。会場の誰もが、各々の立場で共感できたのではないかと。また、生島はシンポジウム「HIV/AIDS患者のパートナー・家族・遺族への精神的ケアをめぐる」において、薬害HIV感染被害者遺族の方等とともに、陽性者周囲への支援について話し合った。生島が語った同性カップルの死別にまつわる出来事に、自分もわずかながら「ぶれいす」に関わっていることに、誇りを感じた。



会場入り口の看板

会期を通して気になる話題がいくつかあった。まずはAIDS関連悪性リンパ腫について。HAARTが功を奏し、日和見感染症の合併が減少傾向にあるなか、悪性合併症の一部は相対的に増加し、上記については標準治療も示されていないという。会場で意見を戦わす医師達の姿を見て、不安や焦燥を抱いた。抗HIV療法のみならず、悪性腫瘍の抗癌化学療法までも守備範囲に、とするHIVの専門家に、多くの経過順調な陽性者達が、声をかけづらくなるのではと、そんな思いもよぎった。

一方、我が国でも従来の作用機序とは異なる抗HIV薬が承認されるなど、新薬に動きがあるなか、治療開始のガイドラインがCD4<350に引き上げられた。科学的根拠をもとに、壇上の専門家達も異論はないと語ったが、旧ガイドラインを知る陽性者にとっては複雑な思いであろう。相談員の立場ですら動揺する。

未だかつて、これ程考えさせられる学術集会はなかった。抗HIV薬は飲みやすくなり、慢性の感染症といわれて久しい。だが、感染報告は右肩上がり、「いきなりエイズ」も減っていない。病気への偏見は根深く、他人事意識も変わらない。医療者、関係者の疲弊感もいかにばかりか。それでも我々は歩みを止めないだろう。新しい情報や経験の共有が、自ら初めてHIV/AIDSとかかわった頃に戻してくれる。そしてまた、新たな内なる力を呼び起こしてくれる。日本エイズ学会はそのような場であり続けて欲しい。

「はじめての学会記」

大槻 知子

「HIV 陽性者参加支援スカラシップ」というプログラムがある。専門家の集まりになりがちな学会により多くの陽性当事者のひとたちが参加し、HIV に関する最先端の情報を集め、関係者とのネットワークを築く機会を得てもらうことを目的に、ふれいす東京が当事者団体や支援団体などと協働して、3 年前から運営しているものだ。

その事務局窓口を一昨年から担当しているが、スカラシップ応募者の方から「スケジュールはどこで手に入るの?」「受付では名前を言わなきゃならないの?」等々学会に関する質問を受けることがあり、そもそも学会に行ったことがなかったわたしは、一緒に考えたり、あちこち聞いてまわって調べたりしたものである。やり取りの中である方がおっしゃった、学会は自分とは縁遠く場違いなところ…そもそも何をやっているところ?という感覚は、わたしも同じように共有していた。

そんなわたし自身も今回、はじめて学会に参加した。

出発前に「どんな服を着ていけばいいんだろう?」なんて心配もしたが、会場にはかっちりとしたスーツ姿のひともしれば、ラグランシャツにハーパンのひともして、多様なひとたちが共存している環境は、決して居心地が悪くはなかった。学会員でなくても参加できる、地域のひとたちに開かれた演目も多かった。

せっかくだからと、社会系を中心に色々なプログラムを見てみた。興味が似通っていたのか、行く先々の会場でたびたび顔を合わせた方と「また会いましたね」などと笑いあったり、普段めったに会えない遠方で活動している NGO 仲間との再会を喜んだりもした。ある演目では、自身はスカラシップによって参加している陽性者だと名乗った上で、フロアから積極的に発言していた方を見かけた。そんな目に見えるもの見えないもの、抱えきれない程のおみやげを持って、帰りの新幹線では学会シックで少ししみりしてしまった。

研究者や支援者、そして一般参加者のみなさんにとって、この学会参加が実り多きものであったことを願う。

「空席に積み上げられた芳醇なリンゴ」

宮田 一雄

池上千寿子会長のもとで、運営委員の末席に連ねていただいた、あの輝かしい第 20 回大会を唯一の例外として、日本エイズ学会にはこれまで、取材目的で参加してきた。今回は学会初日の 11 月 26 日午後、サテライトシンポジウム 1「両手一杯のリンゴ すべてを抱えることはできない」のコーディネーター兼座長をお引き受けしていたので、いわば第 2 の例外であり、取材+アルファでの参加となった。

シンポはエイズキャンペーンと報道の関係を少し掘り下げて考えてみたいという動機で計画し、ザ・ボディショップのバリューズ推進室長の藤田紀久子さん、サンスター広報室の吉田智子さん、Tokyo FM 番組プロデューサーの東島由幸さん、そして私の 4 人がそれぞれの立場から話をするようになった。

簡単に紹介すると、藤田さんは企業のエイズキャンペーンに長く取り組んできた豊富な経験をお持ちであり、吉田さんは企業内でエイズ対策への関心を高め、新たなキャンペーンを生み出す推進力になった方である。東島さんは

テレビとラジオという 2 つの異なるメディアにおけるキャンペーンを手掛けて素晴らしい成果をあげ、私は新聞記者として実り少ないエイズ取材を続けてきた。

いま、この大いなる無関心の中で、エイズに関するメッセージを伝えるとはどういうことなのか。企業およびマスメディア（もちろんメディアも企業ですが）の様々な視点から刺激的かつ示唆に富む意見が交わされたのではないかと、企画した本人は思っている。

タイトルの「両手一杯のリンゴ」は文字通り、両手にどっさりリンゴを抱えた状態であり、そのまま机の上のもう一つのリンゴを取ろうとすればどうなるか。手中のリンゴもばらばらと落ちてしまうだろう。

残念ながら今回は、会場に空席が目立つシンポではあったが、一回の議論ですべてを抱え込む必要もまたない。情報にかかわる議論は多様である。次回、次々回と芳醇なリンゴを積み上げる機会を作っていきたい。

「エイズ学会という『場』」

岳中 美江

今回の学会は大阪での開催だったので、いつものように旅行気分?な部分はなく、3 日間たんと会場に通った感じだった。会場に入るとすぐのロビーがブース展示場になっており、その中には関西で活動する支援関連のグループ数ヶ所の資料がひとつの机に置かれているブースもあった。学会でこのような形でプレゼンテーションがなされたことについてとてもうれしく感じた。

私は主に、自分が活動している検査相談・陽性者支援関連のセッションに参加した。(自分の発表の最終準備で必死だったこともあり、充分とはいかなかったが…)

HIV 検査相談のセッションでは、この分野に取り組む様々な立場での発表があり、活動の広がりを感じた。私は、検査相談は支援のスタートという思いで通常から関わっている。検査相談と陽性者支援をしている関係者がひとつの「場」を共有して報告し合うことができたなら、全国から関係者が集まるこの学会の意義が高まるのかもしれないなどと感じた。

支援関連のセッションでは、先輩団体のプログラムについての話や、相談内容の報告のしかたなどについて大変参考になった。自分が関わる相談活動を振り返りながら、照らし合わせて考えることができた。

大阪での開催だったことも影響してか、またスカラシップ制度のおかげもあると思うが、関西地域の陽性者の参加がけっこうあったのではないかと感じた。HIV の分野で現在どのようなことが起こっているのか、学会がその情報を収集できる場のひとつになるのはよいことだと思う。

来年も学会がそのような場所になり、基礎医学や臨床以外の発表や討議もより活発にできる場になることを期待したい。



ポスターセッションの会場

部門報告

(2008年10～12月)

ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

◆ホットライン部門・活動状況（）内は出席人数

10月	4日	HL研修／オリエンテーション（10名）
	5日	HL研修／オリエンテーション（6名）
	10日	東京都電話相談連絡会（3名）
	12日	HL新人研修〔第1日〕（18名）
	13日	HL新人研修〔第2日〕（20名）
	18日	モニタリング&実地研修開始
	19日	世話人会（4名）
		スタッフミーティング（19名）
		有志昼食会（18名）
		学習会「陽性者対応（基礎編）」（16名）
		HL研修（補講）（3名）
11月	14日	東京都電話相談連絡会（3名）
	16日	世話人会（6名）
		スタッフミーティング（22名）
		カマササイズ（6名）
12月	8日	東京都ボランティア講習会「HIV/AIDSとドラッグをめぐる取り組みの現状」（5名）
	12日	東京都電話相談連絡会（3名）
	17日	ぶれいす東京「電話相談記録票」検討（2名）
	23日	スタッフミーティング（27名）
	28日	電話相談仕事納め

◆相談実績報告

—ぶれいす東京エイズ電話相談—

	10月	11月	12月
日数（日）	4	5	4
総時間（時間）	16	20	16
相談員数（延べ人）	4	5.5	4
相談件数（件）	46	43	38
うち（男性）	32	36	32
（女性）	14	7	6
（不明）	0	0	0
（陽性者）	1	1	3
1日平均（件）	11.5	8.6	9.5

—東京都夜間・休日エイズ電話相談—（委託）

	10月	11月	12月
日数（日）	13	14	12
総時間（時間）	39	42	36
相談員数（延べ人）	27	32.5	27
相談件数（件）	245	265	251
うち（男性）	204	219	209
（女性）	40	45	39
（不明）	1	1	3
（陽性者）	2	0	2
1日平均（件）	18.9	18.9	20.9

毎年この時期は、新人研修に力を注ぐことが一番の楽しみです。新しいスタッフを迎え入れることは、緊張しますが新しい出会いを生み、スタッフ全体が良い意味での緊張感に包まれます。また今年は嬉しいことに、希望者が多く、嬉しい悲鳴となっています。春が待ち遠しい今日この頃です。

（報告：佐藤）

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

（第1木曜 11:00～、第3木曜 18:30～ ※11月は第1土曜日の午前中に開催）

10/2	中止	10/16	7人
11/1	6人	11/20	8人
12/4	中止	12/18	5人

※ 個別のミーティング（10月～12月） 8件

◆利用者数

13カ所の病院に通院中、もしくは入院中の23名の方にのべ25名のバディスタッフを派遣

◆活動内容（2008年12月末現在）

派遣継続中	23件
在宅訪問	12件
病室訪問	3件
在宅の電話のみ	2件
派遣休止	3件
担当調整中	3件

◆新規派遣 4件

外来の看護師の紹介2件、家族の紹介1件、ネスト利用者1件

◆10月～12月の派遣調整 3件

◆今後のミーティングの日程

（日程が変更になっています。ご確認ください。）

午前ミーティング 11:00～13:00

3/7（土） 4/2（木） 5/2（土）

午後ミーティング 18:30～20:30

3/19（木） 4/16（木） 5/21（木）

※ 2009年も土曜日の午前ミーティングを2ヶ月に1回、奇数月の第1土曜日に開催していく予定です。平日のミーティングに参加できない方はぜひご参加下さい。

◆バディの現場から

11月3日（祝）にバディ・ワークショップを行い、9名が参加、

研修修了後に登録を行いました。加えて当日は1名の利用者にスピーカーとして協力していただきました。

新規派遣の相談が4件あり、外来の看護師に紹介されたケースが2件、残りの2件がすでにぶれいすのサービスを利用した経験のある人、もしくはその家族からのケースとなっていました。うち2件は身体に何らかの障がいを持ちつつ在宅で生活をしている方になっており、担当者の調整を行っています。また、新規の派遣調整にあたって、11月に研修を修了した新人のバディにも早速活動してもらっています。新しいスタッフの力を借りて、これからもバディ派遣を円滑に調整していきたいと思っておりますので、スタッフのみなさま、ご協力よろしくお願いします。
(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)(*ファシリテーターなど)	
10月	27日	169名	(12名)	(12名)
11月	25日	142名	(4名)	(7名)
12月	22日	199名	(11名)	(16名)

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆カフェ・ネスト (詳細は p.6)

10月：5回 56名
11月：4回 46名
12月：3回 46名

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

・新陽性者 PGM 第42期 (参加者5名)
10/4 (修了)

・新陽性者 PGM 第43期 (参加者5名)
10/18 11/1 11/15 12/6 (修了)

・新陽性者 PGM 第44期 (参加者6名)
12/18

・陰性パートナー・ミーティング 11/8 (3名)
・ミドル・ミーティング
10/11 (6名) 11/8 (8名) 12/13 (11名)

・もめんの会 (HIV/AIDS を支える母親の会)
10/6 (3名)

・Women's Salon
第6回「Women's Salon の新しい女性スタッフを迎えて」
10/5 (2名) (詳細は p.6)

・カップル交流会
11/2 (10名)

◆学習会 / イベント

・12/6 ネスト庵「歳暮の茶会」(参加者13、ご亭主2)(詳細は p.7)

・12/20 ネスト年末パーティ (参加者28名) (詳細は p.6)

◆ミーティング (陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
10/16 (6、8) 12/11 (6、9)

・新陽性者 PGM 事前打合せ
10/11 (2、2) 12/8 (2、2)

・web NEST 運営委員会
10/23 (2、2) 11/21 (2、2) 12/19 (2、2)

・ネスト世話人会 11/14 (1、3)

・支援アクセスミーティング 12/12 (1、3)

◆ネスト・ニュースレター

10/17 10月号発行
11/19 11月号発行
12/15 12月号発行

◆長期療養時代シリーズ web アンケートを行いました

長期療養時代シリーズ 2008「生活者の視点からとらえる HIV 陽性者の治療・医療とのつきあい方に関する調査」のweb アンケートを11-12月にかけて実施しました (JaNP + /ぶれいす東京協働プロジェクト)。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。アンケート結果をまとめて冊子を制作し、2009年3月に発行する予定です。詳しくは、ぶれいす東京のサイトや次号のニュースレターをご覧ください。
(報告：はらだ)

Gay friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動
<http://gf.ptokyo.com>

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

10月 8件 (1日平均2.00件)
11月 7件 (1日平均1.40件)
12月 8件 (1日平均2.00件)

◆聴覚障害者向けのメール相談に対応

聴覚障害者の方の感染不安などの相談窓口として、Gフレのメールアドレス (gf@ptokyo.com) で相談を受け付けることになりました。

◆展示イベントを開催

昨年に引き続き、2つの展示イベントを開催しました。今回は新しい手記集のリリースにあわせた展示イベントとなりました。11/25～12/7には、新宿二丁目コミュニティーセンター akta にて「episode from OUR DAYS」を、また12月の1ヶ月間は同じく新宿二丁目にある CoCoLo cafe にて手記集と同タイトルの「OUR DAYS Episode2」を開催しました。

なお akta で展示されたパネルは12/16にTOKYO FM ホールで開催されたリーディングイベントの会場でも展示され、多くの方にご覧いただくことができました。akta 及び CoCoLo cafe でのイベントの詳細は、5ページをご覧ください。(報告：sakura)

HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績 2008年10～12月

	2008年	10月	11月	12月
電話による相談		48	38	50
対面による相談		44	30	50

2008年	10月	11月	12月
E-mailによる相談等	80	34	84
うち新規相談	16	12	21
※メール新規は含まず			

◆ 10～12月の新規相談者の属性 (N=49)

陽性者： 38人(男性：36 女性：2)
 パートナー(元)： 1人(男性：1 女性：0)
 家族： 3人(男性：1 女性：2)
 その他： 3人(男性：1 女性：2) ※判定保留事例
 専門家： 4人(男性：0 女性：4)
 (保健師、区役所窓口、MSW、福祉事務所)

◆ 10～12月新規相談者の情報源 (N=49)

WEB(携帯含)： 15件
 パンフレット等： 6件(含む戦略MSM首都圏冊子)
 看護師： 4件
 家族： 3件
 保健所/検査所： 2件
 クリニック： 2件
 職場： 2件
 講演会： 2件
 政治家： 2件
 行政： 1件
 医師： 1件
 MSW： 1件
 電話相談： 1件
 友人： 1件
 陽性者： 1件
 以前から知っていた： 1件
 不明： 4件

◆ 10～12月の新規相談内容 (N=49) ※印は判定保留事例

【ミーティング/ネスト利用等】

- ・PGMのオリエンテーションで来所。
- ・関西から東京に転居してきた。いろいろな場をみたかった。
- ・妻が先にぶれいす東京に相談していた。PGMに参加を希望。
- ・ミドルに参加したい。1年ちょっと前に感染がわかる。
- ・クリニックの看護師から紹介された。PGMに興味。
- ・都立病院ではあまり情報提供がなく、自分でネットで得た。

【検査や告知】

- ・2週間前に保健所で感染がわかったが、全く予想外だった。
- ・関西からの相談。3週間まえに告知を受けたばかり。
- ・皮膚科で医師に同意なく、検査をされて陽性が判明した。
- ・告知直後から服薬を開始。副作用が大変。主治医からの紹介。
- ・PGMに参加希望。献血でわかる。派手に遊んだこともないので予想外。
- ※妊婦検診で陽性。確認検査待ち。お腹の子供がどうなるのが不安。
- ※彼女と二人でいった検査で、彼女だけ判定保留で、二人とも混乱。
- ※クリニックでの検査で判定保留。セックスの相手が多く不安になり受検。
- ※大学病院で検査の説明を聞いたが理解できずにいた。確認検査中。

【人間関係】

- ・1年前に感染が判明した。友達とか恋人が欲しい。
- ・元関係者から感染。その人とネストであわないか不安。
- ・陽性者の両親が来所。妻だけがしばらく、事実をかかえていた。
- ・付き合い始めの子がいて、検査にいった。
- ・親の介護中で、誰かと話す機会がない。自分で連絡するのにも抵抗があった。
- ・最近、感染が判明。他のゲイに会いたくない。どの医療機関がいいか。
- ・母親からの相談。感染している息子の話を聞き不安になった。
- ・関西から。最近、感染がわかり、妻にも伝えた。これから服薬開始。
- ・今、自宅で療養中。ヘルパーがきてくれるが、話し相手が欲しい。

【心理的なこと】

- ・自分は医療従事者なので、感染が納得できない。
- ・2年前に感染が判明したが、その事実を誰にも伝えていない。

【医療など】

- ・東京周辺から、都内に移転すると、経済的な負担はどう変わるのか。
- ・関西から都内に転居。歯科、クリニックについて知りたい。
- ・東北の女性。保健所で感染がわかった。HPVもあり不安が強い。
- ・告知から10年。服薬開始を検討中。セカンドオピニオンについて知りたい。
- ・千葉県内の病院で告知。医師も混乱していて、訪問調の質問を浴びせられた。受診するのが嫌になってしまった。
- ・九州沖縄から。医療機関が3分診療なので、不安。どうしたらいいか。
- ・大学病院の耳鼻科で、触診もせずに、写真ばかり撮られて不信感をもった。
- ・北海道から。投薬開始時期について。CD4が200を2回きっている。主治医の手帳の診断書が4級だった。
- ・11月に救急車で入院。カリニ肺炎だった。
- ・カンジダで開業医(耳鼻科)で改善せず、大学病院で陽性と診断された。
- ・病院で検査数値を間違えて説明され、信頼ができない。
- ・会社の同僚で行った検査で陽性だった。紹介病院に不満。
- ・CD4が200くらいになったところで服薬開始。免疫再構築が不安。
- ・リポジストロフィーについて聞きたい。新しい薬の情報を知りたい。

【生活や福祉】

- ・入院中に陽性が判明、友達の家を点々としていた。今は福祉の世話に。
- ・結核で感染が判明した。今は超過滞在なので、帰国を考えている。
- ・アパートが火事になり、焼けだされてしまった。
- ・感染が判った後に、パソコンを使いだし、ここにたどりついた。

【就労】

- ・10年前に感染を知った。障害者枠で働いているが、ストレスが大きい。
- ・障害者控除を職場に知られない方法を聞いたのだが、大丈夫か。
- ・先月感染がわかった。カリニ肺炎だった。今は、休職中。

・オペ前検診で判明。健康保険を利用すると会社にバレるのか。

【専門家】

- ・MSW、職場の上司から相談したらといわれた。在宅に戻したい患者がいる。
- ・区の福祉の職員。病院から退院をせまられている人がいて困っている。
- ・保健師。パートナー告知について紹介したいがいいか。
- ・区役所の窓口で陽性者の方がいらしている。どう対応したらいいだろうか。

(報告：牧原 / 福原 / 生島)

研究部門

厚生労働科学研究費補助金

◆「地域における HIV 陽性者等支援のための研究」

(研究代表：生島 嗣)

- ・HIV 陽性者の支援に携わる地域支援者（コーディネーターナースら）を対象にグループインタビューを実施。
- ・HIV 陽性者へのインタビューによる事例を収集。
- ・ぶれいす東京の相談記録のためのフォーマットの開発と、新陽性者 PEER Group Meeting の効果評価アンケートの分析を継続。
- ・埼玉県立大学の若林チヒロさんの分担研究では、全国の中核・ブロック拠点病院などの協力のもと、HIV 陽性者の生活と社会参加に関する全国調査を開始。
- ・杏林大学の大木幸子さんの分担研究では、全国の保健所保健師のインタビュー調査を実施中。
- ・チャームの青木理恵子さんの分担研究では、関西で陽性告知を受けた HIV 陽性者の事例をインタビューにより収集。
- ・研究班の成果を公開し、HIV 陽性者の支援にかかわる人のためのリソースやツールを集めた「地域における HIV 陽性者等支援のためのウェブサイト」をオープン (<http://www.chiiki-shien.jp>)。

エイズ予防財団 研究成果等普及啓発事業

【大阪】

2008 年 11 月 28 日（金）に、大阪国際交流センターにて、第 22 回日本エイズ学会サテライトシンポジウム「関西地域における HIV 陽性者の支援を考える：HIV 検査から HIV 診療の間にあるニーズとその課題～現場からの報告～」を開催。来場者 226 名。

【東京】

2009 年 1 月 21 日（水）に、新宿文化センターにて、シンポジウム「HIV 陽性者と社会生活」を開催。大阪・東京両会場ともに、発表会の詳細は次号 NEWSLETTER で報告予定。
(報告：大槻)

エイズ予防のための戦略研究（研究リーダー：市川誠一）

◆MSM 首都圏グループ

- ・各種資料の完成

各種グループ（聴覚障害者、依存、多言語、10 代等）とのコラボレーションにより、複数の啓発用冊子を作成。11 月より始まったクラブキャンペーン「REAL Living Together」などで配布しています。加えて、ゲイバー対象の定期誌「TOMARI-GI」を開始しました。12 月には、TOKYO FM とのコラボレーションイベント「TFM × LT 計画× ecocolo ポエトリー・リーディング～ Think About AIDS」を開催。

- ・「HIV マップ」などの web 展開

内容強化した携帯電話対応の web サイト「HIV マップ mobile」の他、エイズデー周辺の検査イベント情報を紹介した「ゲイ・バイセクシャルにやさしい あんしん HIV 検査サーチ」とクラブキャンペーンサイトが起動しています。

- ・MEN-DO キャンペーン開始

首都圏ゲイバー（新宿、横浜など）を対象とする「バー・アンケート」を 1 月から 2 月にかけて実施。2008 年 7 月から 9 月にかけて実施した携帯電話アンケートの結果について、順次フィードバックしていきます。

(報告：岩橋)

◆MSM 京阪神グループ「陽性者サポートプロジェクト関西」

- ・電話相談：10 月：3 件、11 月：2 件、12 月：0 件

11 月より新規相談員 3 人が電話相談のモニタリング開始

- ・地域カンファレンス

2008 年 10 月 26 日 参加人数 29 名
松本恵子さん（大阪市北区保健福祉センター）に北区におけるに北区における HIV 検査体制について話題提供をいただきました。その後、グループ検討、意見交換を行ないました。

- ・新規陽性者向けプログラム準備のための検討会

インテーク機能&スタッフのリクルートの検討が進んでいます。

- ・web「陽性者サポートライン関西」の部分的なリニューアル作業を実施。

(報告：生島)

編集後記

- ・自分への誕生日プレゼントにオーガニックコットンのパジャマを購入！ 気のせいかもしれないけど良く眠れます…。(こんどう)
- ・昨年は、キースヘリングの生誕 50 周年だった。「キースは、もう、50 歳なんだ！」と思っていたら、同じ昭和 33 年うまれだった。彼は永遠に若いままだ。(いくしま)
- ・二十数名の方から原稿をいただいて 60 号が無事発行できました。早いもので、立春が過ぎ、もう年度末、そしてお花見や活動報告会の季節ももうすぐ。今年はどこかでちゃんと息抜きをしよう。(やじま)

編集・発行：特定非営利活動法人 ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-22-46 ザ・テラス 204

TEL：03-3361-8964（月～金 12:00～19:00）

FAX：03-3361-8835

E-mail：info@ptokyo.com

ぶれいす東京 HP：http://www.ptokyo.com/

Gay Friends for AIDS：http://gf.ptokyo.com/

web NEST：http://web-nest.ptokyo.com/